

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】早丸一真

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院総合文化研究科

【研究題目】近代中国の外交体制と天朝定制

【研究の目的】(400字程度)

東アジアでは19世紀の後半から外国の公使が日本・清・朝鮮の首都に常駐するようになった。北京では1861年にイギリス・フランス・ロシアの公使館が開設されて公使の駐在が始まり、条約を締結した国々の外交官と清の官僚との間で日常的に交渉を行うことが可能となった。こうして、中国は国際社会に参入していったとされる。中国はいかにして外交を行うようになったのかという視点から、近代的な外交体制の創出や外政機構の整備について検証し、近代外交の形成過程を解明することは中国の近代史にとって重要なテーマであろう。だが一方で、19世紀半ばの清の官僚は対外関係を夷狄の相手をする業務(「夷務」)の範疇の中で処理していた。本研究の目的は、19世紀半ばの清の官僚が、対外的な問題をどのような思考の枠組みの中で認識し、それに対応していたのかについて、同時代の当事者の視角から検討することである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、これまで中国外交史研究の中で普遍的な尺度に引きつけて語られがちであった「外交」の観念を、当時の歴史的な脈に位置づけ直し、外交関係、対外政策などの枠組みがいかなる思考様式の上に存在していたのかを問い直す。そのために、19世紀後半の清が、どのような体制であったか、どのような制度のもとで外国との問題を処理していたか、対外的な問題を政治課題全体の中にどのように位置づけていたかについて当時の史料に即して検証する。

本研究ではまず、これまでの研究の中で論じられてきた外交体制という分析視角について再検討する。従来の東アジアの近代史研究においては、近代的な外交体制が創出される過程は、伝統的な外交体制が解体されてゆく過程と表裏一体のものとして考えられてきた。しかしながら、こうした見方には、いくつかの疑問が残されている。すなわち、外交体制が「創出」されたというのは誰の目線か、伝統的な外交体制というのは「外交」体制と称すべきか、そして、そもそも外交体制とは何かという問題である。これらの問題に取り組むため、一次史料の読解に基づく実証研究及び東アジア、東南アジア、西アジア、欧米をフィールドとする近現代の外交史、思想史、社会経済史、国際関係史の研究者らと継続的に研究会を行い、議論のプラットフォームを構築する。

次に、本研究は、従来の研究が用いてこなかった新しい史料に基づいて先行研究を乗り越えようとするよりもむしろ、従来の研究が根本史料として取り扱ってきた史料を読み直すというアプローチを重視する。検討の対象となる主な史料は『籌辦夷務始末』である。特に検討を要すべき事例については、『清実録』その他の関連史料も参照しつつ作業を進める。この作業を進めるにあたっては、台湾中央研究院及び国立故宫博物院図書文献館において史料調査を行う。

【結論・考察】(400字程度)

本研究のもう一つの主題である天朝定制は、従来の外交史研究において、対等な国家間関係及び「対等交渉権」を否定するための方便と見なされてきた。こうした観点は、「対等交渉権」を清に要求するも拒絶された19世紀初頭以前の西洋諸国の側の目線に由来している。当時の西洋人のまなざしは、以後の歴史研究の中でも繰り返し補強され続けることとなり、天朝定制は前近代的な遺制としてネガティブな位置づけを与

えられ、それが実際にどのようなものであったか明らかにされないまま、多くの研究者の関心は清がどのようにして近代外交を開始したかという問題へ向けられた。本研究が批判的検討を行った外交体制という枠組みを前提とした議論は、その最たるものである。同時代の史料を見る限り、少なくとも 1860 年代の初頭において、外交体制を創出するというような当事者の気負いは見られない。彼らはただ統治の常道に照らして既成のルーティーンをアップグレードしようとしただけである。